

# 第4分科会「里山と動物」

テーマ：農業が元気になれば、人も動物も元気になる♪

日時：2008年4月19日(土)13:00~17:00

場所：Qiball（キボール）13F 3号室

参加者：30名

スタッフ：中野真樹子、石山大

## 趣旨

野生動物の被害防除、「被害防除策」としての家畜の放牧など、野生動物・飼育動物双方の福祉についての話題提供を行った。



## 内容

1. 「里山農業のあり方～野生動物との共生システムと家畜福祉畜産の開発～」  
松木 洋一（日本獣医生命科学大学 名誉教授）
2. 「里山とツキノワグマ～里山と野生鳥獣との相対への考え方～」  
田中 和博（京都府立大学大学院 教授）
3. 総合ディスカッション（「里山と水鳥分科会」との総合討論）  
松木 洋一、田中 和博、栗原 裕治（NPO 法人千葉まちづくりサポートセンター副代表）  
荒尾 稔（水鳥分科会代表）、中野 真樹子（動物分科会代表）

## 結論

1. 「里山農業のあり方～野生動物との共生システムと家畜福祉畜産の開発～」

本来の農業とは、工業のようにモノを製造する産業ではなく、生物を育てる産業である。栽培作物のみを残し、他の生物を害虫や雑草として完璧に排除する近代化農法は人類史のなかでも戦後のほんの50年に過ぎない。その結果、集約化・化学化・機械化による環境汚染、食の安全性の脅威、生物生態系の破壊、動物虐待等をもたらした。



21世紀型農業＝『自然共生農業』

その2本の柱は…生物多様性保全と家畜の健康と福祉

## 生物多様性保全：

農業は多様な野生生物を資源として活用し、強制技術を開発してきた長い歴史を持つ。農業の持続的発展のためには、生物多様性保全のために生物生態系とその生息環境を経営・管理する自然共生農業システムへの転換が不可欠。

世界) EU の自然共生農業 Nature Management Farming と直接支払い制度

日本) 高い自然価値をもった農産物のブランド化、絶滅危惧種野生動物と共生する農業計画、全町 1000 ヘクタール自然共生農場づくり構想等の先進的動向

### 家畜の健康と福祉:

家畜は単なる農産物ではなく、「痛みや苦しみなどによるストレスを感受することが出来る生命存在」である。よって、その性的行動要求にあった飼育環境を整備して、ストレスを軽減することによって病原体への免疫力を高め、健康と福祉を実現できる。

健康な家畜が供給する畜産物によって人間の健康が保てる。

動物の 5 つの自由 (①飢えと渇きからの自由、②肉体的苦痛と不快感からの自由、③傷害や疾病からの自由、④おそれと不安からの自由、⑤通常的な行動要求が実現できる自由) の実践。

世界) EU における Farm Animal Welfare 運動、OIE 世界家畜福祉ガイドライン

日本) 生産者・消費者の情報不足と無関心、専門家の不足、国際状況認識不足と政策化の遅れ

## 2. 「里山とツキノワグマ～里山と野生鳥獣との相対への考え方～」

演者らはインターネットを利用することによって住民から自然環境情報を収集するシステムを TML



社と共同で開発した。これを用い、京都府内におけるツキノワグマの目撃情報の収集を行ったところ、里山ならびに野生鳥獣がおかれている現状が見えてきた。

### クマの出没傾向;

柿はクマ出没の誘因の一つであり、また、人身事故も周辺で起きることが多い。特に、クマが身を隠して柿の木に近付ける環境では危険度が高い。

### クマはなぜ里山に出没するか？;

クマの安全＝一に身の安全、二に十分な餌。したがって、クマの安全は猟師やいないこと、安心は餌が容易に手に入ること。よって、人里離れたところに餌が十分あれば、クマは里山においてこないと考えられる。

### 課題;

では、奥山の森林の現状はどうなっているのか。最新の研究によれば、地球温暖化の影響のためか、ブナ科樹木の衰退と生物季節の変調が生じているとする報告があり、クマの餌資源の減少が憂慮される。以上のことから、人と野生鳥獣との共生は、単に、保護区を設定したり、森林をゾーニングするだけで解決できる問題ではないことが示唆される。野生鳥獣の生息地を質的に改変してしまった人類の文明そのものを改めて問い直す必要がある。

### まとめ

2 つの基調講演より、現代の農業の反省と再生が家畜及び野生動物の生活環境の向上につながることを再認識し、里山やそれを利用してきた人々の暮らし、21 世紀型の農業を実践すべく、千葉県での取り組みに向けて今後も話し合いを継続することにした。